



標題は、言わずと知れた、サンモンとカーファンケルの不朽の名曲 Bridge Over Trouble Waterの邦訳だ。「君が辛く、厳しい時は、その困難な荒波を乗り越えしめるように、僕が橋になってあげよう」といった歌詞のうたです。文字通り「荒波に架ける橋」ではなく「明日に架ける橋」と邦訳し

### 明日に架ける橋

たのは、前向きなイメージが出て、とてもセンスのいい邦訳だったと思います。さて、なぜ今回これを標題としたのかについて語りたいと思います。今回は、オホーツク海を隔てた対岸にある、ロシアと北海道との関係について、語りたいからです。この地域では、領土問題をはじめ漁業権、カーニ・ビジネスなどを巡るトラブルが絶えませんし、過去の歴史を調べていくと、後ほど述べるように、何やら大変物騒な話に遭遇しました。標題の趣意は、「過去において西国間にはいろいろ問題があったが、こうした事実は冷静に直視しつつも、困難(荒波、荒海)を乗り越えて、

前向きかつ建設的に、明日(未来)へ向けて橋を架けて行く努力をしていきましょう」ということだ。当地に赴任してきた際、当地ビジネスマン、特に年配の方々のロシアに対する不信感はとても強いものがあると感じました。「俺の眼の黒いところはロシアとビジネスをしてはいけない」とか、「ロシア人は信用してはいけない」など言っておられる方もいました。道外の方のほうにロシアに対する嫌悪感が相対的に少ないとの印象を持ちました。旧ソ連崩壊後、市場経済の一員となり、ロシアに対する世界の関心は一気に高まりました。また、ゴールドマン・サックス社のレポートによれば、将来有望な市場であるBRICsを構成する一国として脚光を浴び

した。日露間のさらなる友好関係を樹立し、ビジネス面で安心して取引ができるような環境を整えていくことは、今後益々重要になるのではないだろうか。そして、その過程には北海道がしっかりとかかわることが大事だと思います。本市では、ユジフ・サハリンスクとの間で友好都市提携を結んでいます。北方仕様の住宅建設技術の提供などを始め、経済交流が一層進むことを期待しています。

さて、それでは物騒な話とは何か。今夏、天売島・焼尻島を訪ねようと留萌から羽幌に向けて天売国道を北上していた際、小平町付近で樺太引揚三船遭難慰霊之碑に目がとまりました(旧花田家番屋の向いです)。これは終戦後に樺太から引き揚げた人々を乗せた船三艘(艦船が鬼鹿沖などで旧ソ連軍の潜水艦に、公式には国籍不明とされている)から攻撃を受け、二艘が沈没、一艘は何とか留萌港に辿りついたものの、合計で千七百名余りの死者を出したと言われている事件で、なくなった方の慰霊碑です。わが国がボツダム宣言を受諾し、無条件降伏をしたあとですから「戦争は終わった。もっ少しで祖国だ」と思った矢先の出来事だったのでしよう。関係者の悲運は、想像するに余りありません。それでは、なぜそんなところに旧ソ連軍とされる潜水艦が停泊していたのか。複数の書物によると、スターリン率いる旧ソ連軍はほとんど留萌港から上陸する予定で、現実論はともかく、留萌市と釧路市を結んだ直線以

尾家啓之(おいはらけのりゆき) 一九五八年(昭和三十三年)東京生まれ。一九八一年(同五十六年)日本銀行に入行。米国内閣の行政改革会議事務局への出向総務人事企画役などを経て、〇七年(平成十九年)から旭川事務所長。趣味は音楽全般。シンガー・ソングライターとしても活動中。

北を直線するつもりだったらしい。仮にそうだったら旭川は北側に、わが国のボツダム宣言受諾がさらに遅れていたら、また、米トルーマンが毅然と拒否していなかったら、旭川をはじめとした道北地域は今頃…。歴史にはあきませんが、真夏の夜にぞっとした話を見聞したのでした。(日本銀行旭川事務所長 ※毎月第一週掲載します)